

まち

No.6 2016年 新春号

発行日：平成28年1月21日
発行：日本大学理工学部まちづくり工学科教室
☎ 03-3259-0531 (学科事務室)
発行責任者：八藤後 猛 (教室主任)
編集担当：高村義晴
制作：株式会社 ムーンドッグ

contents

巻頭言	1
企業セミナー	2
インターンシップ	5
特集 特色ある授業紹介	6
まちづくりニュース	7
公務員講座・資格	8
コラム〈私とまち〉	8

巻頭言

就職へ向けて - 君たちは夢を見つけたか -

理工学部就職指導担当 教授 天野 光一



就職とは、学生諸君が自身の夢を実現する場を見つけることです。君たちは、まちづくり工学科の授業を通して自分の夢を見つけましたか。

君たちは、日本大学工科の歌「若きエンジニアの歌」を知っていますか。引用しましょう。

1. 昭煥しょうかんの日出づる 国こそわが祖国
其の名をば担いて 聳ゆわが母校
伸びゆく日本の 力は茲ここに
地を拓き行く者 若きエンジニア
2. 青春に夢あり 宇宙に真理あり
現実と理想を 結ぶもの我等
科学の力と 不屈の意思を
武器として進まん 若きエンジニア
3. 永遠の光を 現世に与うべく
限りなき奉仕と 愛の心もて
新たに幸ある 世界を築く
わが腕はえに榮あり 若きエンジニア

2番の夢はまさに諸君らが持つべきまちづくりのプロフェッショナルとしての夢であり、諸君らが学んだことが科学の力だと思っています。そして、3番にあるように、新たに幸ある世界、すなわち良い「まち」を築いてください。

夢を発見するには、まず自己分析が重要です。過去の自分を振り返り、現在の自分を見つめ、将来の自分を想像してください。自分がやりたいことを考えて、より具体化するために、業界研究、企業研究をしましょう。どのような業界、企業でどのような仕事ができるのかを知らずして、就職は考えられませんし、イメージで選んでは、採用に結びつかないど

ころか、採用されても、諸君らの夢の実現にはつながりません。自分のやりたいことと違うなと思っている業界、職種でも、夢の実現につながる場を発見できるかもしれませんし、少なくとも今後まちづくりという総合的な分野で活躍するために有効な知見を得ることができるでしょう。理工学部やまちづくり工学科では、さまざまな職種、業種の方の話を聞く機会を設けています。積極的に参加してください。諸君がこの文章を読んでいる時点でほとんど参加していないとしたら、明らかに遅れています。

もちろん採用に結びつけるためには勉強が必要です。就職試験は、試験ですので、当たり前ですが試験勉強をする必要があります。筆記試験に合格しなければ先に進めませんし、エントリーシートも自分の志望理由を明確に書く必要があります。さらには面接試験もきちんとした対応が必要です。

保護者の方々にもお願いがあります。学生諸君の長所探しと一緒に考えてあげてください。学生諸君の価値観を尊重しながら、将来の展望についてヒントを挙げてください。また、職場として有名なところが良いという考えはいったん頭から外してください。有名か否かというより学生諸君が自分の夢を実現すべくやりがいのある職場を見つけることが重要です。

最後に、就職は学生諸君の人生設計に大きな影響があります。ある程度人生を決するといっても過言ではありません。職場がどうしても合わない時の転職を否定するわけではありませんが、初めから夢の実現できる場を選択したほうが良いに決まっています。学生諸君、真剣に取り組みましょう、教員も、職員も全力でサポートしますから。

まちづくり工学科就職支援・キャリア教育プログラム

まちづくり工学科就職指導担当 仲村 成貴



3年生後期は、いよいよ就職活動の時期に入ります。大学・学部・学科がさまざまな就職支援・キャリア教育プログラムを特に集中開催する時期です。まちづくり工学科でも学科独自の就職支援・キャリア教育行事を精力的に開催してきました。

誰しも、自分が「知らない」ことを「やりたい」とは思えないはず。まずは学生に「知ること」から始めてもらうことをねらって、11月～1月にかけて計6日間10回にわたって企業セミナーを開催いたしました。まちづくりに関連した建設業、不動産業、建設コンサルタント業、観光業、医療・福祉業の計39社・機関に企業セミナーにご参加いただき、業界や業種、企業紹介などをそれぞれ直接に学生へ説明していただきました。ご協力いただいた企業・機関の方々に深く御礼申し上げます。

まちづくり工学科主催の就職支援・キャリア教育行事

- 5月28日 企業懇談会（専任教員対象）
- 6月6日 説明会「就職に対する心構え」（3年生ご父母対象）
- 10月5日 就職活動ガイダンス（3年生対象）
- 10月19日 千葉市役所講演会（2、3年生対象）
- 11月30日 株式会社大京講演会（2、3年生対象）
- 12月19日 株式会社リクルートキャリア講演会（3年生主対象）
- 11～1月 企業セミナー（3年生主対象）

（まちづくり工学科就職指導担当

横内 憲久 天野 光一 城内 博 高村 義晴 仲村 成貴）

企業セミナー概況

企業は日々それぞれに、自分の強み・弱みを見つめ、時代の要請や経済社会の変化に的確に対応することを迫られます。その企業でやられていること、やり方は年々進化、変わっていきます。私たちがもっているその企業のイメージというもの、いい意味で裏切られることが少なくありません。

他方、企業にはそれぞれ企業文化・風土というものがあります。それは、業務内容と違って、インターネットの世界ではとらえにくいものです。直接、その企業の方のお話を伺い、教えていただくなかで感じとっていくものです。

今回の企業セミナーでは、このようなことにあらためて気づかされました。何がしたいか、ということより、何が

できるか。そこに働く自分の姿や、自分がイメージできることが大事です。それぞれに企業の皆さま方のご説明を伺いながら、このような想いの契機となったはず。企業セミナーに参加した学生諸君の声をいくつか紹介します。

- これまで希望するところを決め切れていなかったが、気になるところが出てきた。
- これまで漠然としていたが、話を聴いて具体的な選択肢が見えだしてきた。
- どうしても行きたいと思っていたところがあり、試しに類似の企業の話も聴いてみた。それでも、自分の気持ちは動かず、気持ちがより強くなった。
- 地方での就職を希望しているので、そういう関係の企業の方の話も聴きたい。
- やはり時間が足りなく、もう少し時間がほしかった。

学生の皆さんが、あとあと振り返り、よかったと思える仕事に就いていくには、「企業研究（公務員研究を含む）」と「自己研究」の両面が必要となります。まちづくり工学科では、ここに紹介した企業セミナーを始めとする企業紹介に力を注いでいます。また1年次の「まちづくりと職能I」という講義のなかでは、市町村や民間企業の方をお呼びし、まちづくりに関連する業務について講話をお願いしております。



一方で、自己研究については、自分が何に興味あり、生きがいとできるのか、自分を知る必要があります。自分の強みと弱みを理解することも大事です。まちづくり工学科の授業では多くのまちづくりの事例にふれることができます。また2年次には都内や近郊のまちを、いくつかのコースに分かれて、教員の紹介で巡り、深くまちづくりにふれる「オリエンテーション」を開催しています。そのような事例のなかから、なんとなく気になる事例や取組みを並べ、自分の関心・興味の核心を探り出すことで、自分が熱中できる仕事を見出せる一助になればと、願っております。

(文責 高村 義晴)



インターンシップ

インターンシップ

教授 城内 博



1. インターンシップの目的・ねらい

インターンシップ（就業体験）は3年生の授業として、各種講座へ参加、夏休み期間中のインターンシップ、その後の報告会を経て単位認定している授業科目です。

その目的はこれまでに習得したまちづくりに関連する知識や技術を、行政機関あるいは企業での実習の場で実践することです。同時に、インターンを通して卒業後に活躍したい場を展望し、将来の進路決定に役立てるねらいもあります。

2. 概要

前期初日の4月9日に学科主催で全3年生を対象にインターンシップの概要説明（参加者65名）および4月30日にコンピテンシー診断結果を踏まえたフォロー講座（参加者52名）が実施されました。また、5月13日、14日には理工学部主催のインターンシップ説明会も開催され、まちづくり工学科としては計30名の学生がインターンシップの概要やその意義等の説明を受けました。

以上のような事前準備を行った後、6月4日にインターンシップ参加を希望する学生（以下、「参加希望学生」）を対象にインターンシップ参加方法に関する学科主催のガイダンス（参加者44名）を行いました。また、参加希望学生には理工学部主催で6月10日、11日に行われた「応募書類作成講座」への参加も促し、計39名の学生がインターンシップを実施する際に受け入れ機関に提出する書類の作成方法を学びました。そして、7月23日には学科主催でビジネスマナーの習得を目的とした「マナー講座」を行い、参加希望学生およびその他の3年生（参加者68名）が参加しました。

インターンシップ受け入れ機関は「学科に募集依頼のあったインターンシップ受け入れ機関（以下、「受け入れ機関」）を紹介してもらう」、「学生自身が行ってみたい受け入れ機関を独自で探す」といった方法で学生自身が選定をします。受け入れ機関が決定した学生は受け入れ機関との打ち合わせを行い、夏休みが開始と同時にインターンシップも開始となります。

3. 報告会（平成27年9月16日）

後期初日の9月16日に、「インターンシップ」の受講者16名による報告会が行われました。発表は、受け入れ先の概要、志望理由、実習内容の詳細や期間中に習得した成果など、受講者おのおのが身をもって体験した生きた内容ばかりで、報告会に参加した教員からは「まちづくり工学科らしく多岐にわたる分野の報告がなされた」や、受講者からは「学生同士、刺激を受け合った報告会であった」などの感想が出ました。「インターンシップ」による就業体験は、3年生後期から始まる就職活動へのはじめの一步。これからが本番ということで、受講生の目の色が変わったように見えました。今後に期待しています。

(3年生クラス担任 城内 博)

落合 正行 (補助) 西山 孝樹 (補助) 牟田 聡子 (補助)

インターンシップに参加して～感想～

インターンシップに参加しての体験の感想や成果などを8名の学生諸君にお願いいたしました。(次ページよりご覧ください)

■ 越谷市役所

長島 知宏

私は8月10日（月）～21日（金）越谷市役所のインターンシップに行きました。2週間の実習のうち、最初の1週目は建設部の道路建設課、2週目は都市整備部の都市計画課を含めた5つの課でお世話になりました。道路建設課では道路橋の点検や道路の拡幅における測量体験などをしました。都市整備部では、公園遊具の点検や、建築確認申請の現場の見学、市街地再開発事業・建築協定の現地案内などを体験しました。自分がこの実習で得たものは、市役所の仕事の雰囲気を知れたことやまち科の科目である都市計画などの授業で得た知識が社会でとても役に立つということです。まち科の授業にある土木・建築・福祉などの分野を網羅していれば、将来まちづくりの仕事をするには有利だと思います。



■ 国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所

竹下 晃司

国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所に8月31日～9月11日までの約2週間行きました。実習期間中は3つの課を回り、各課の担当河川での調査に同行しました。中でも、多摩川支流浅川の低水流量観測では見たことない機械を使い、川に入って特定断面に沿って流れる水の速さを計測し、それら計測値から計算し流量を出しました。定期的な計測は被害を未然に防ぐ対策を講じるためということを教わりました。実習の最後には活動報告会が行われ、質疑の際にお言葉を頂き、一緒に仕事をしてみたいと思えるところでした。実習はあっという間で、「行政仕事の現場」を知るいい機会であったと思います。後輩の皆には、行きたいと思ったところに積極的に参加することを勧めます。



■ UR 都市再生機構

尾崎 直弘

「まち科に入って良かった……」インターンを終えた後、そう思ったのを今でも覚えています。

私が10日間お世話になったのはUR都市再生機構です。さまざまな場所に事業見学に行き、その事例をもとに6名のインターン生と「押上北地区のまちづくりの提案」についてワークショップを行い、その提案を最終日に発表をしました。共に頑張った仲間は有名国公立の学生ばかりで、正直、最初はひるんでいました。しかしワークショップが始まれば、その話し合いをまとめているのは自分でした。行くまでわからなかった「まち科の武器」。それは土木でも建築でもない私たちだから持つ“視野の広さ”なのです。私はそこに気づくことができ、コミュニケーションの重要さも知りました。皆さんにもまち科の強みを、インターンを通じて感じてほしいです。「まちを想う気持ちは誰にも負けない！」と胸を張って、共に頑張りましょう。



■ 長岡市 市民協働推進室

村山 旭

私のインターンシップは長岡市役所市民協働推進室での3日間でした。この推進室は、行政とNPOが協働で運営し、市内の行事を主催・支援する活動を行っています。アオーレ長岡の整備管理と9/23市民フェスタの準備および当日運営という、推進室の日常と非日常の体験をしました。『市民一人ひとりが協働のまちづくりの主役を担い、お互いが支え合い、つながり合う』まさに長岡市民の絆を深める、人と人とのまちづくりでした。当日は市長さんが私たちインターン生を見つけて声をかけて励ましてくださるなど、行政の心配りと市民とのふれあい等、机上では得られない貴重な経験をし、人と人との関係は切り離してはならないというまちづくりの根底を実感しました。



■ パシフィックコンサルタンツ株式会社
本社 総合プロジェクト部 地域政策室

柳川 星

大学で学んでいるまちづくりの手法が実務の現場においてどのように生かされているのか体験したいと思い、コンサルタントのインターンシップに参加しました。期間は8月10日～21日でした。インターンシップで取り組んだ内容は、「某市の人口ビジョン・総合戦略策定支援にかかわる課題点・解決策・参考事例の調査の抽出」「高速道路の整備効果の予測」の2点です。

インターンシップを通して、大学で学んだ「知識の使い方」に加え、「お客さまの要望に応える」といった大学の授業だけではわからない多くのことを学ぶことができました。学んできたことを生かせる喜びを感じた反面、自分の知識・技術力不足を改めて認識しました。こうした経験は、現在、学業への取り組む際の緊張感や危機感につながっています。インターンシップは就職活動の参考としてだけでなく、力試しの良い機会となり、日々の学習のモチベーションの向上につながっています。また、コンサルタントの仕事について理解を深めるとともに、仕事に取り組むプロの技術者の姿にとっても魅力を感じました。最後にインターンシップ先の社員の方々には、丁寧なご指導をいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

■ 株式会社熊谷組

加藤 有紗

8月24日～9月4日までの10日間、熊谷組にて、私は施工管理のインターンシップ業務に携わりました。主に日本大学法学部5号館の新築工事における床や階段のコンクリート打設や配筋検査等の工事の管理や現場作

業の他に、施工状況の資料をまとめ、着工から現在までの作業の流れを把握するといった業務でした。大学の授業ではまちという大きな範囲を視点に物事を考える作業であったため、ひとつのものを注視して考えることはなかったので、この施工現場の見学により初めて机上のデザインではない、ひとつの建物が出来上がるまで、どのような工程、期間が必要なのか実感することができました。建築の実際を知る良い経験になるので参加することを勧めます。



■ 青森県庁

南 将之進

活動内容としては、まず公務員とは何かというものを学びました。期間は5日間でした。授業内でたびたび学んでいましたが、現職の方からこのようなお話を聞いたのは大変身になりました。次に青森県の現在行っている事業内容について、河川課や道路課などの代表者の方々から説明をいただきました。授業では学ぶことのできない深い話まで聞けるのは大変良かったと感じています。他には現場見学やVEワークショップ演習等を行いました。VEワークショップのやり方を学ぶことができたのが私自身の成果だと感じます。現場見学においても自分の見てきたこととして語れるので成果として言えると感じます。授業では学ぶことができないこともインターンでは学ぶことができるのでぜひ行かれたほうが良いと思います。



■ 豊島区役所

白石 翔大

インターンシップ先は豊島区役所都市整備部で、期間は8月26日～9月1日でした。活動内容としては、池袋駅の西口・東口の現地視察、震災復興まちづくりへの参加、池袋本町地区校舎併設型小中連携校建設工事の現場視察など幅広くまちづくりにかかわる業務に携わらせていただきました。行政は住民の声に耳を傾け、ニーズに沿ったまちづくりを企業との連携も取り持ちながらまちづくりを進める調整業務を担っており、まちづくりの目線から見ると必要不可欠であると思いました。インターンシップは、社会人になる前段階として仕事に向き合うことができ、社会人としての仕事に対する責任感をさらに感じる事ができる貴重な経験ができると思います。



日本大学では、「自主創造」を教育理念として掲げています。「自主創造」とは、自ら考え、自ら学び、自ら道を開く精神を意味します。このような精神を持った学生を輩出するには、私たち教員も、教員としての能力・資質を高めていくことが求められます。そのための活動が、まちづくり工学科としても必要とされているFD (Faculty

Development) にほかなりません。

今回は、学生諸君の関心や興味を引き起こさせ、理解力や学習効果を高めるための授業の工夫と授業風景を二つ紹介します。このような授業紹介を通し、学生諸君の主体性を開花させ理解度の向上に資する「授業デザイン」がさらに広がっていく必要があります。

1年生必修科目「測量実習」

教授 後藤 浩



「まち」の構成要素として、橋・道路などの土木構造物や、ビル・住宅などの建築物が挙げられます。すなわち、「まち」の空間の大きさを測定する技術は、まちづくり技術者にとって絶対に欠かせないスキルです。測量実習は、そのようなニーズに応えた実習科目として、1年生に設置されています。本実習では、主として「距離を測ること」、「角度を測ること」、「高低差を測ること」を柱として、校舎内の地物を対象とした実地での測定作業を行っています。例えば、「距離を測る」といっても、器材による要求精度はさまざまです。「歩測」、「巻尺」、「光波測距儀（トータルステーション）」と使用器材の性能や特性に合わせた精度を、段階を追って学生に課しています。当然、要求精度を満足できなければ、できるまで測定のやり直し（再測）を指示し、学生たちのスキルを磨くようにしています。さらに、実習の成果物として、図面の作成、統計学的な要素を含む精度の計算レポートなどに取り組みさせています。これらの成果物に関して、指示・要求を満たしてい

なければ、「再提出」を延々と繰り返し指示しています。

上述のシステムで授業を行っていますが、本実習には、授業内容以外にも副産物的な効果があると考えています。実習における測定作業は5名～7名程度のグループで取り組みます。グループ内での協調性やリーダーシップをとる人が欠如していると、測定作業は遅々として進まないことは自明です。教員からの特段指示はないものの、測定作業進行を円滑にするために、グループ内で議論し、解決するプロセスが、自然発生的に出来上がります。このようなプロセスを繰り返し実体験することは、将来、まちづくりを担う技術者として大いに役立つスキルになろうと考えています。また、種々の課題を仲間とともに取り組むのに必要とされるチームワークは、良い友人関係を醸成する種となっているとも考えています。

授業担当 教授 後藤 浩 准教授 仲村 成貴
非常勤講師 荒川 洋・細瀨 裕史
事務担当 西山 孝樹



写真1 平板測量の様子



写真2 水準測量の様子

2年生必修科目「まちづくりワークショップⅠ」

教授 岡田 智秀



まちの将来のありかたをどのように考え、どのような将来像を描くかは、他人任せにせず、その土地で暮らす人たちが自ら回答を導く時代になりました。近年その討議方法として「まちづくりワークショップ」が各地で取り組まれ

ています。こうした近年のまちづくりニーズに的確に対応できる人材育成をねらいとし、当学科ではワークショップの意義や進行方法および結論の導き方などを習得する「まちづくりワークショップⅠ（2年必修）・Ⅱ（3年必修）」

を設置しています。本稿では「まちづくりワークショップ I」を紹介します。

この第1課題では、受講生にとって身近なテーマで議論が深められるよう、「まちづくり工学科の魅力と特色」をテーマにグループ討論を行い、その成果を誰もが楽しんで理解してもらえよう、大判ポスター上に成果内容を魅力的に表現します。第2課題では、第1課題の成果を本学の地元である御茶ノ水地区の活性化に生かすための議論を行い、その成果をポスター表現します。受講対象の2年生は、入学後初の御茶ノ水キャンパスライフを体験し始めているので、地区内をよく調べながら当地区の課題や魅力を議論し、当学科の学生や教員が果たせる地域貢献について提案を行います。最後の第3課題では、地域をより広域に

とらえ、当学科関係者に限らず自由度を広げ、現状の御茶ノ水地区の課題・魅力に対して、より魅力的な地域形成を実現する方策を提案します。さらに、御茶ノ水地区の大型模型製作（1/500）を全受講生で取り組んでおり、昨年の1期生から譲り受けた同模型をベースに、今年の2期生は建物の塗装を行いました（来年のオープンキャンパスで展示予定）。こうした一連の課題演習を通じ、受講生は対立意見の調整方法や議事進行、共同作業の意義・分担方法等を習得するとともに、仲間同士で築いた魅力満載の提案ポスターや大型模型という“宝物”を獲得していきます。

授業担当 教授 岡田 智秀 教授 青木 和夫
准教授 依田 光正 非常勤講師 水谷 智充
事務担当 牟田 聡子



写真1 第3課題「御茶ノ水再生計画」の成果発表会



写真2 1期生から2期生に受け継がれた御茶ノ水地区の大型模型

まちづくり NEWS

「生涯活躍のまち（日本版 CCRC）」構想について

教授 青木 和夫



2015年8月に日本版 CCRC 構想有識者会議から「生涯活躍のまち」構想の中間報告が提出された。CCRC とは Continuing Care Retirement Community の略であり、継続介護付き高齢者居住地域という意味である。アメリカでは退職高齢者が元気なうちから介護を必要とするまで、移転することなく継続的なケアを受けられるようなコミュニティを CCRC と呼び、自立して生活できる住居から、介助が必要になった場合の支援機関、さらに介護が必要になった場合の施設などがそろっていることが条件となっている。また、元気な高齢者がスポーツや芸術などを楽しめるほか、積極的な社会参加ができるような仕組みが必要とされる。

日本版 CCRC では、今後東京圏の高齢者の介護施設が不足すると予想されることから、東京圏から地

方への移住を促進することがねらいとなっている。地方自治体では人口の増加と同時に介護関連の雇用が増加することなどがメリットとして考えられるが、この構想に手を挙げる自治体はあまり多くない。その理由として、既に高齢化率の高い地域にさらに高齢者を居住させれば、将来は極めて深刻な超高齢コミュニティとなり、さらなる介護の必要性の増大への危惧などがある。また、CCRC で生活できる人は、それなりの資産を持っている必要があり、ごく一部の裕福層しか住めないのではないかということも指摘されている。東京圏に住む一部の裕福な高齢者層を地方に居住させることによって生ずる経済効果のみに注目するのではなく、移住者が地域社会の中に入ってどのような役割を果たすことができるのかといった視点からの検討が必要であろう。



まちづくり工学科では、公務員希望者を支援するため、大学本部や理工学部主催のセミナーや講座に加え、独自にまちづくり工学科としての公務員講座を開催してきています。

難題が山積し、果敢な挑戦が行政においても必要とされるなか、地方公共団体それぞれに公務員試験に工夫が見られだしています。教養試験・専門試験・論文・面接の配点や、論文試験の出題、面接方法も多様化。論文や面接を重視するところも少なくありません。論文や面接試験についていえば、受験する地方公共団体の課題や取り組みを、相当踏み込んで理解していなければ対応できない地方公共団体も増えつつあります。

このような傾向に備えるため、それぞれの受験先の募集要領の見方、それに対応した受験対策、論文対策の仕方などを助言しています。受験先それぞれに対応した“傾向と対策”に力点を置く。これが、まちづくり工学科としての公務員講座の特徴といえます。(まちづくり工学科公務員担当 高村 義晴 後藤 浩)

(資格)
もはやまちづくりは、土木行政、建築行政、これらの関連行政分野だけではなく、産業、観光、福祉、教育、さらには都市の活性化、地方創生など広範な領域をもつに至っています。

す。今後は今以上に専門的な幅広い知識、より高度な専門知識が求められ、その一つの証しが資格となります。まちづくり工学科では資格の取得を推奨し、そのための講座の開催(宅地建物取引士、技術士等)などサポートに努めています。

今年度も宅地建物取引士2名の合格者が出ました(吉田圭祐さん(3年生)、矢澤竜希さん(2年生))。また嬉しいことに、新たに技術士の第一次試験合格者が1名出ています(柳川星さん(3年生))(1月10日、学科把握分)。このような積み重ねがまちづくり工学科の気風となり伝統となってくれることを心から願っています。

また新たに、国土交通省による技術検定(「建設機械施工」「土木施工管理」「建築施工管理」「電気工事施工管理」「管工事施工管理」「造園施工管理」)について、まちづくり工学科が指定学科に準ずる学科として認められました(担当 仲村 成貴)。これにより学生が指定科目から9単位以上を修得して卒業した後、受験しようとする種目に関し指導監督の実務経験1年以上を含む3年以上の実務経験を積むことで、受験資格が得られることになりました。

column 〈私とまち〉

ときを超えて
受け継ぐ、
わがまち高野口

助手
西山 孝樹

「おかえり。東京から帰ってきたんやね」
「ただいまー」

ランドセルを背負っていた数十年前は、気恥ずかしかった通学路でのやり取りが本当に懐かしく感じる。住み慣れた実家は目の前だ。

私の生まれ育った和歌山県橋本市高野口町(旧 伊都郡高野口町)は、その名の通り、世界遺産に登録された高野山への玄関口として平安時代から栄えてきた。

帰省した翌日、コタツに潜り込んでみかんを食べていると、「久しぶりに、家の周りを歩いてみるかい? おばあちゃん、一緒に行ったらげるわ」

ひょんなことから祖母とまちを歩くことになった。明治以降、高野口のまちはパイル織物の生産が盛んであった。

「昔は一晚中、機械を動かしてたんよ。その振動で家が揺れて、寝られへんかったわ」

今はもう使われていない、特徴的なノコギリ屋根の工場を眺めながら話をしてくれた。そこから少し移動して、高野口の中心部へ。

「本町通りは土日になると、まっすぐ歩かれへんほど、人であふれてたんやで」

全盛期の商店街は旅館や飲食店が軒を連ね、高野山への参拝客、大阪から織物を買付けにきた商売人で賑わい、大変繁盛していたという。しかしながら、今は少しひっそり



図 高野口の中心部には元気な商店や悠久の歴史を物語るさまざまな資源が今なお点在する

としている。大和街道沿いの古いまちなみを横目に見ながら、私を含め親子3世代が学んだ高野口小学校まで歩いてきた。1937(昭和12)年に完成した木造平屋建ての校舎は現役で、2014(平成26)年には重要文化財に指定された。約100mの長さがある廊下で、同級生とぞうきんがけ競争をよくしたものだ。

高野口には、唯一無二の資源が多く眠っている。こんな良いまちに育ててもらったのだから、私もまちを元気づけるために何ができるかを考えながら帰路についた。その道中も、祖母はそこかしこで世間話に花を咲かせていた。ホッとしたのは、まちが変わっても、そこに住まう人たち、遠くに見える山々や悠々と流れる紀の川……普段、何気なく眺めていた風景は何ら変わっていなかったことだ。昨日、通学路で話しかけてくれたあの人、今日も会えるかな。

〈訃報〉
3年生の平嶋裕輝さんが、平成27年12月3日に交通事故にてご逝去

編集
後記

昨年は、当学科としていろいろなことがあった1年でした。そして今年は学科創設4年目を迎え、1期生が就職試験に挑む年となります。それぞれが進路を決定し果敢に挑戦してくれることを切望しています。地方創生が話題となり、自然災害の危険性が切迫するなか、新しいまちづくり人材が飛翔してくれることを願ってやみません。(義)